慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	港区亀塚出土の弥生土器について：一九七一年調査時出土資料の再整理
Sub Title	Yayoi pottery, from Kamezuka site, Minato Ward, Tokyo
Author	下島, 綾美(Shimojima, Ayami)
Publisher	三田史学会
Publication year	2008
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.77, No.1 (2008. 7) ,p.107- 139
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料報告
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20080700-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

港区亀塚出土の弥生土器について

――一九七一年調査時出土資料の再整理――

下島綾美

はじめに

亀塚は、港区三田四丁目亀塚公園内にある人口の築山である。古くから、古墳の可能性が高いとされてきた著名な遺跡であるが、その性格や構築時期は明らかになっていない。慶應義塾大学民族学考古学研究室は、一九七一年に、港区教育委員会の依頼を受けて、亀塚の発掘調査を行っている。この調査では、主体部や周壕・埴輪といった、古墳とする決め手は確認できなかったものの、盛土の状況などから、古墳である可能性が高まったと結論づけられた（清水一九七二）。

この発掘調査では、墳丘内及び墳丘下の土層から、弥生土器を中心とする、比較的多くの土器破片が出土した。そのうち、報告書では、2点の個体資料を含む7点の土器が図化されている。近年、民族学考古学研究室では、収蔵資料の整理作業を進めているが、その際に一九七一年の発掘で出土した土器が、港区に返却されずに残されていることが判明し、その中に今日的な視点において報告すべきと考えられるものが、多数存在していることが明らかになった。

亀塚の位置する武蔵野台地東端部は、江戸時代以来の開発によって、すでに多くの先史時代遺跡が破壊されてしまっている。そのため、この地域の弥生時代の研究を進めるためには、残された断片的な資料を徹底的に収集し、資料化しておく必要がある。その意味で、今回のような既報告の発掘資料を、未報告分を含めて報告し直すことには、大きな意義があると考えている。

一、遺跡の概要

亀塚は、「三田台」と呼ばれる、標高二十七～二十八メートルの台地上に立地する。三田台は、東に東京湾、西側に古川の谷底低地を臨む、北東に長く伸びた舌状の台地である。下末吉面に相当する平坦面が広く残っているが、その中央付近に西側から弱い谷が入り込んでいるため、南北二つの平坦面にわかれているようにみえる。亀塚は、南側の平坦面の北端部に位置することになる。（第1図）

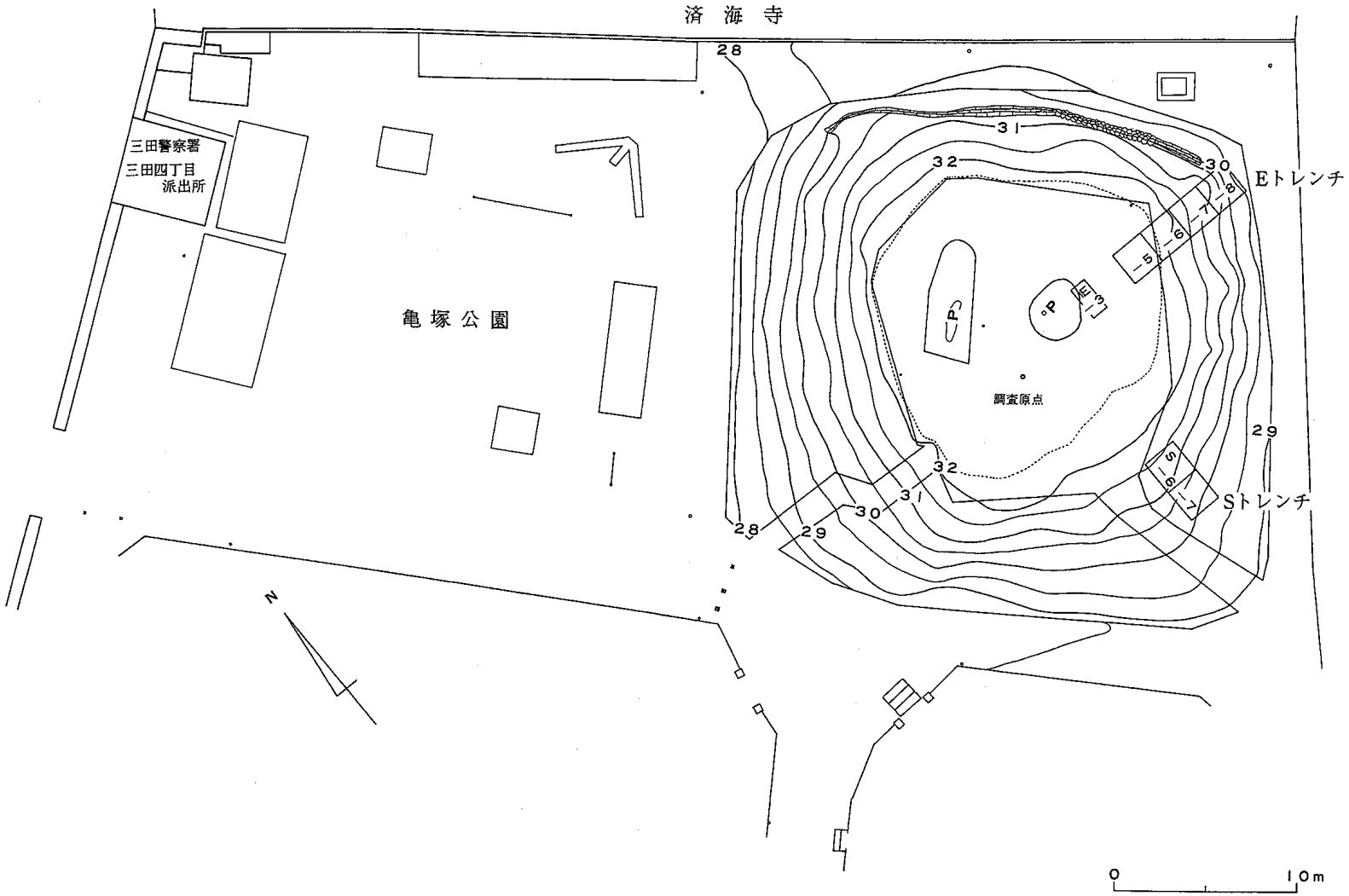
先述のとおり、台地平坦面の大部分は、江戸時代以来の開発によって削平が進んでおり、中世以前の遺構の多くはすでに破壊されてしまっている。しかし、削平が浅く中世以前の遺構が残っている場所が部分的にみられるほか、台地の縁に近い場所にも、こうした遺構が残存している可能性が考えられる。

亀塚は、現状で円形または隅丸方形を呈し、直径三十メートル、高さ四メートルほどの規模をもつ。仮に円墳だとすれば、比較的大型のものということになる。現在は、「古墳時代以降に築造された人工の築山もしくは塚」として、東京都の史跡に指定されている。

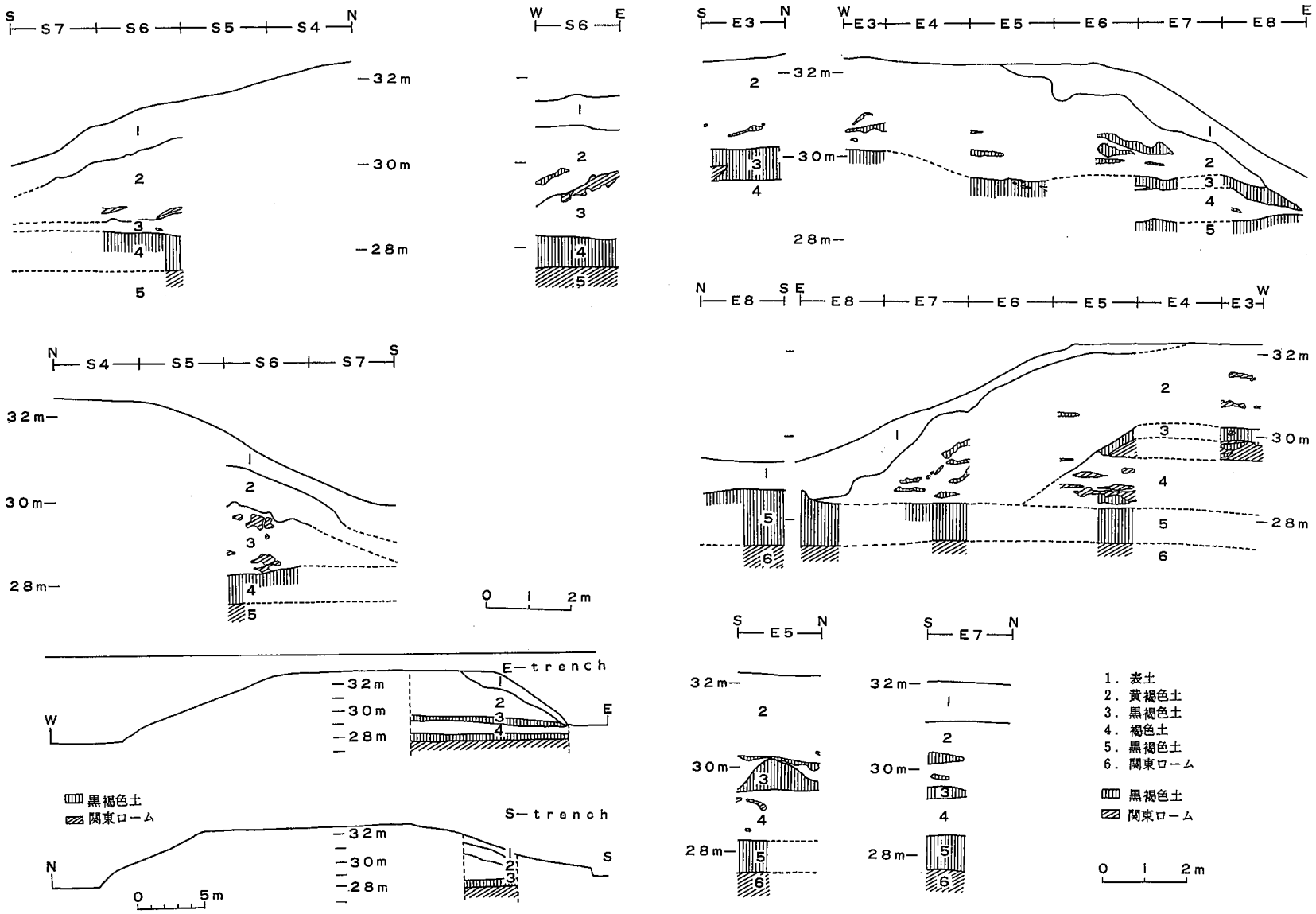
第１図　周辺遺跡位置図
（国土地理院発行一万分の一地形図『渋谷』より）

一九七一年の調査は、十一月十一日～二十四日の約二週間に渡って行われた。墳丘上から墳丘下にかけて、二本のトレンチを設定し、それぞれ現地表面下まで掘削している。その結果、おおよそ現地表面と同レベルにおいて、墳丘構築以前の黒褐色土層の堆積が認められ、また、その下に立川ローム層が確認された（第2・3図）。

遺物は、墳丘から少量の弥生土器・土師器・須恵器が、黒褐色土層から比較的多数の弥生土器が出土したようで



第２図　1971年調査時設定トレンチ位置図



第3図　1971年調査時土層断面図

ある。黒褐色土上面からは、二点の略完形の土器が潰れた状態で出土している（第4図1、第5図4）。こうした遺物の出土状況からみて、黒褐色土層中には、弥生時代～古墳時代の遺構が残存している可能性がある。

なお、亀塚およびその周辺からは、今回報告する資料のほかにも、古くより弥生土器や土師器・須恵器が収集されていた（鳥居一九三五、港区一九六〇、清水一九七二、港区役所一九八〇）。このうち、桑山龍進氏収集の資料については、一九八六年に報告されている（安藤・高山一九八六）。また最近では、港区教育委員会により、亀塚公園内で数度の緊急発掘調査や確認調査が行われており、そこでも弥生時代に属する遺構と少量の弥生土器が報告されている（港区教育委員会二〇〇四、安藤二〇〇五、港区教育委員会二〇〇七）。

また、三田台全体では、亀塚以外にも多くの発掘調査が行われており、そのいくつかの地点で、弥生時代の遺構・遺物が検出されている。亀塚の南二五〇メートルほどの東向きの緩斜面には、弥生時代中期の方形周溝墓2基が検出された伊皿子貝塚（港区伊皿子貝塚調査団一九八一）が存在した。また、その西側の平坦面では、三田臺遺跡（未報告）や、No. 101遺跡（港区No. 101遺跡調査会一九九七）で、弥生時代中・後期の遺構・遺物が検出されている。

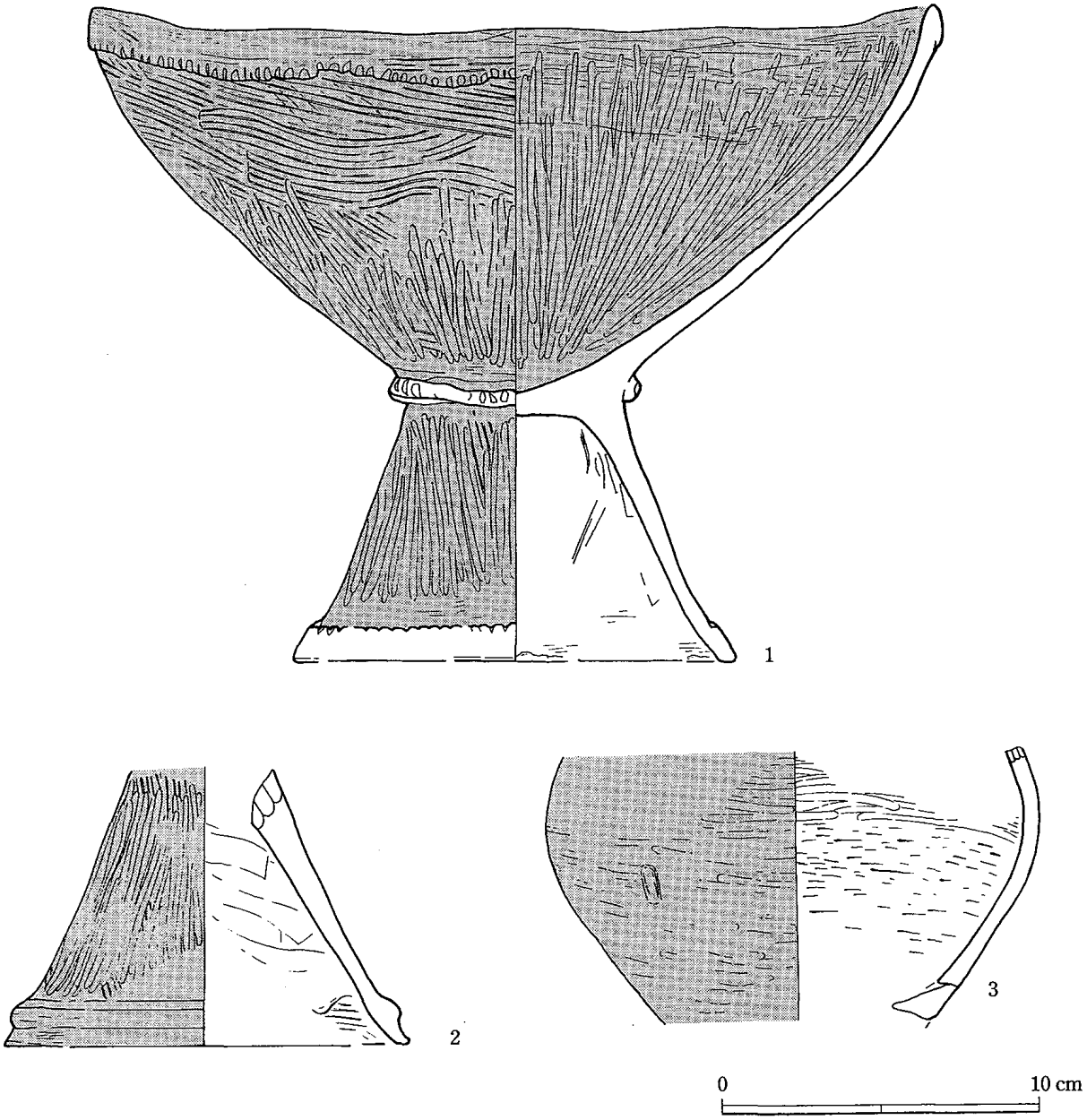
二、出土遺物について（第4～12図、表1）

一九七一年の発掘調査の出土遺物は、2点の略完形の土器のほか、浅い整理箱に十箱程度の量がある。そのほとんどが弥生土器であり、縄文土器や土師器・須恵器はごく僅かである。ここでは、そのなかから土器八十五点、石器一点を報告する。また、筆者が二〇〇六年に亀塚公園南端の、住宅地との境付近で表採した土器片も、合わせて報告することにした。以下、時期ごとに、土器の特徴を説明することにしたい。なお、観察所見の詳細については、表1にまとめた。

・弥生時代中期後葉

第6図8～10、第7図～8図、第11図86・87は、中期後葉、宮ノ台式土器に比定できるものである。

8・9、17～36、86は壺形土器（以下壺と略）である。8・9は底部破片で、いずれも宮ノ台式に特徴的な突出する底部をもつ。8は、二次焼成を受けており、炉台として再利用されていた可能性がある。

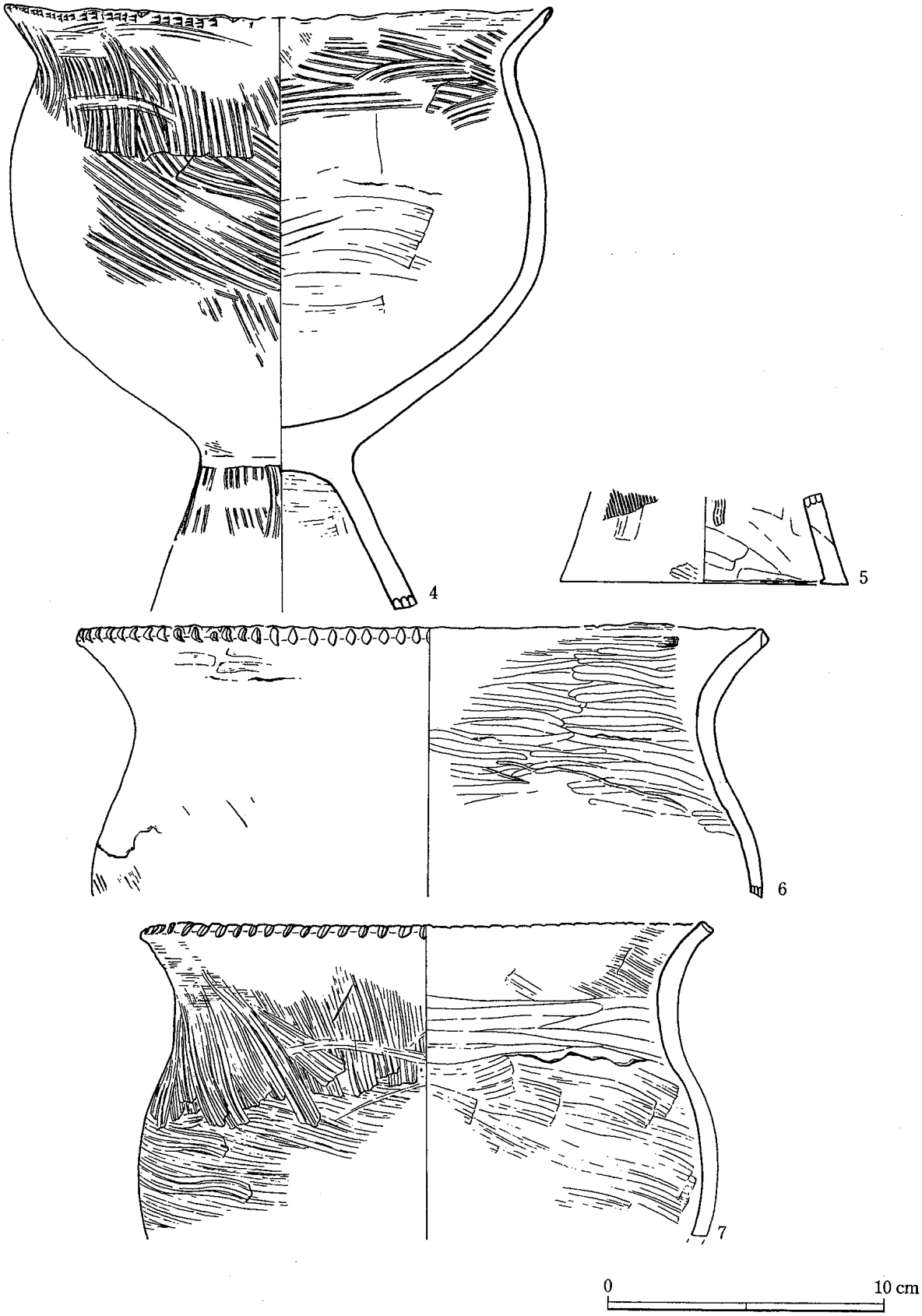


第4図　亀塚出土土器（1）

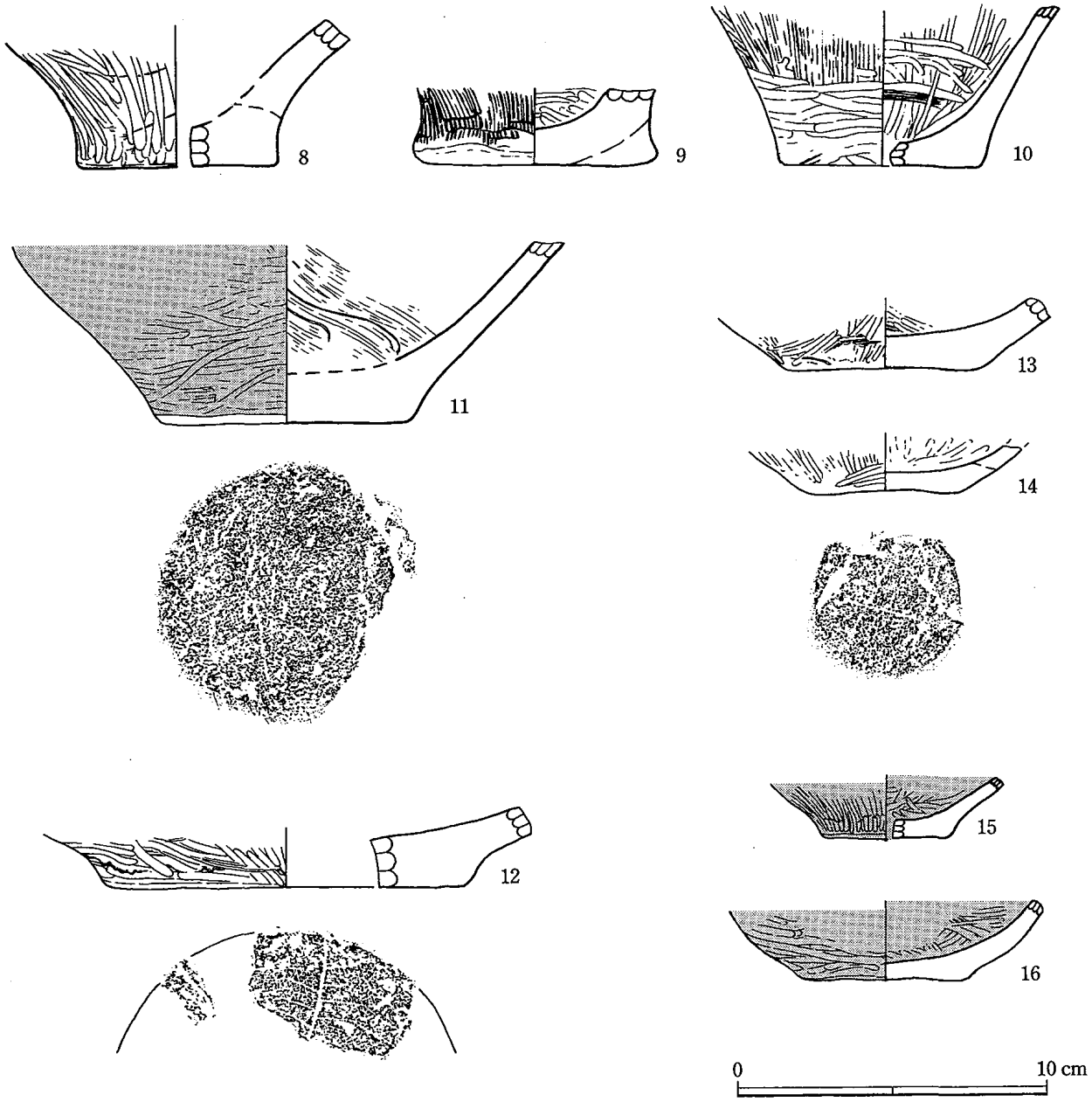
17～19は、口縁部破片である。17・18は、口唇部に縄文が施される。18・19は受口状を呈するもので、18は口唇部上端が短く直立する。19は袋状を呈するものである。いずれも器面はナデによって仕上げられ、17・19にはハケ成形の痕跡が認められる。

20～36は、胴部破片である。20は、二本一単位の施文具で4条の沈線を描いた後、その上下に棒状工具による刺突列を加える。沈線も太く、刺突も大ぶりである。21は、小破片だが、頸部に施された刺突列の一部であろう。

22～27は、櫛描文をもつ。23は、波状文と直線文を交



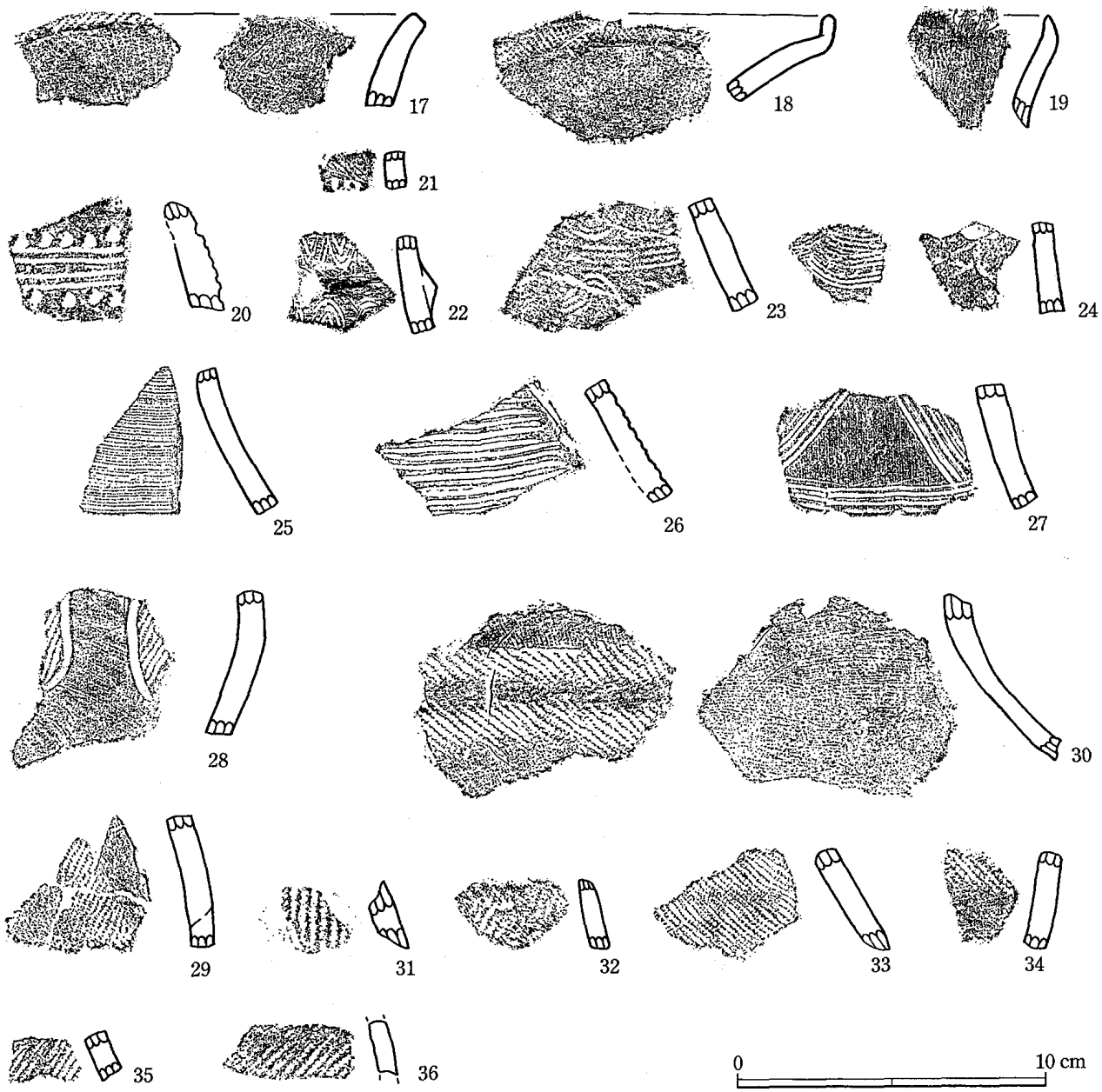
第５図　亀塚出土土器（２）



第6図　亀塚出土土器（3）

互に重ね、下端にハケ状工具による刺突列をめぐらす。24は連孤状の波状文をもつ。25は、頸部～胴部上半の破片で、十二本一単位の櫛歯状工具による短い直線文を重畳する。直線文は右端を揃えて止まり、その右には縦方向のナデの痕跡が認められる。丁字文のような文様と考えることもできる。26は、横方向の櫛描文を充填した山形文、27は、五本一単位の櫛描沈線により山形文を描き、下端を直線文で区画したものである。

28・29は、縄文を用いた意匠文をもつ資料である。28は、無節Lを沈線で区画する。結紐文もしくは舌状文と考えられる。29は、無



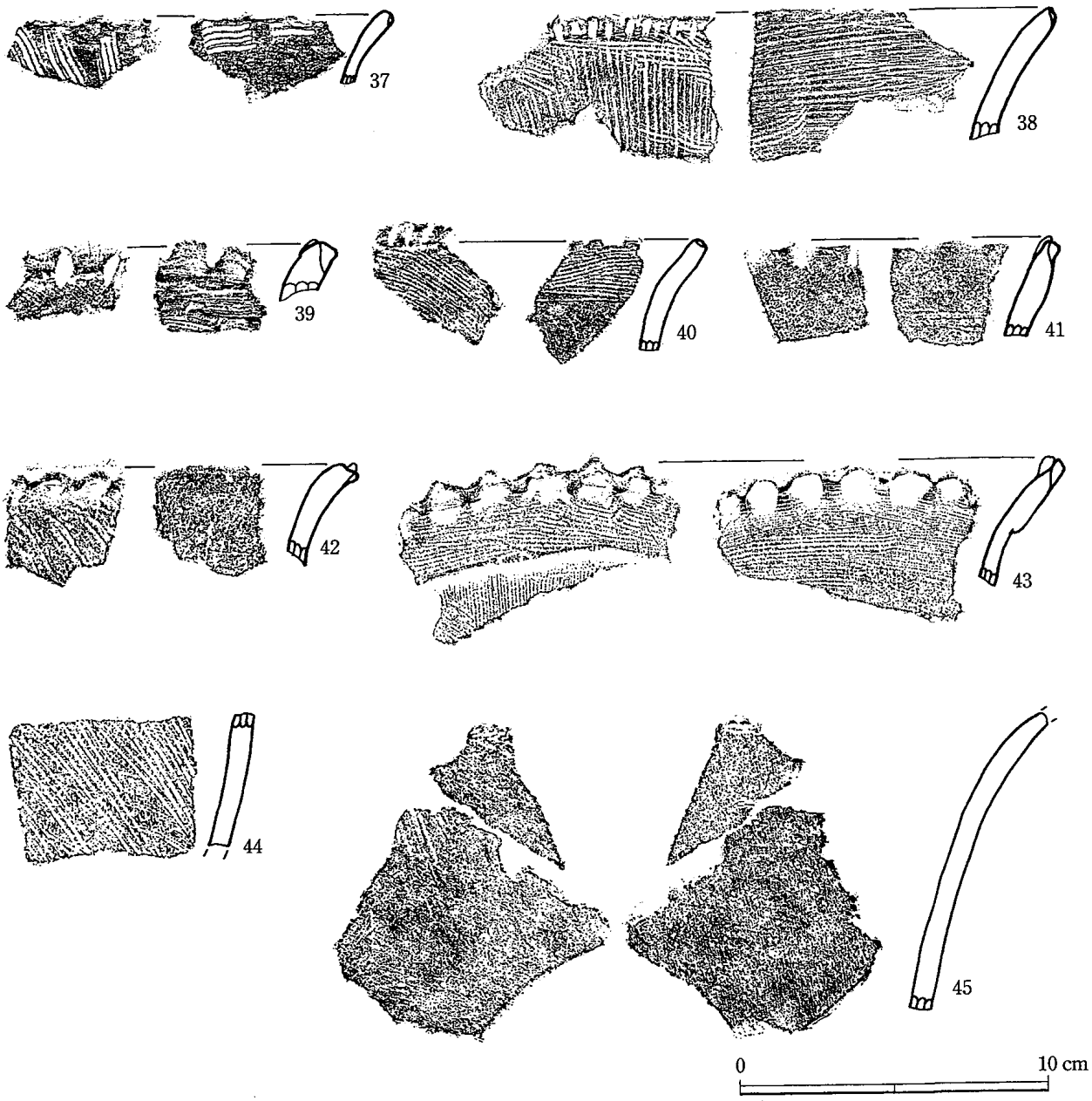
第７図　亀塚出土土器（４）

区画の縄文によるもので、結紐文あるいは山形文であろう。

30～36は、帯縄文をもつ資料である。30は、ＲＬによる縄文帯を二帯重ね、さらに中央をナデ消している。31は結紐文となる可能性もある。31、32、36の縄文は、節がやや粗く大ぶりである。33は、ＲＬ縄文を二帯重ねて幅広の縄文帯としている。

86は、筆者の表採資料である。頸部付近の破片と考えられ、帯縄文の上端を櫛描直線文で区画し、その上にさらに円形の刺突列をめぐらしている。

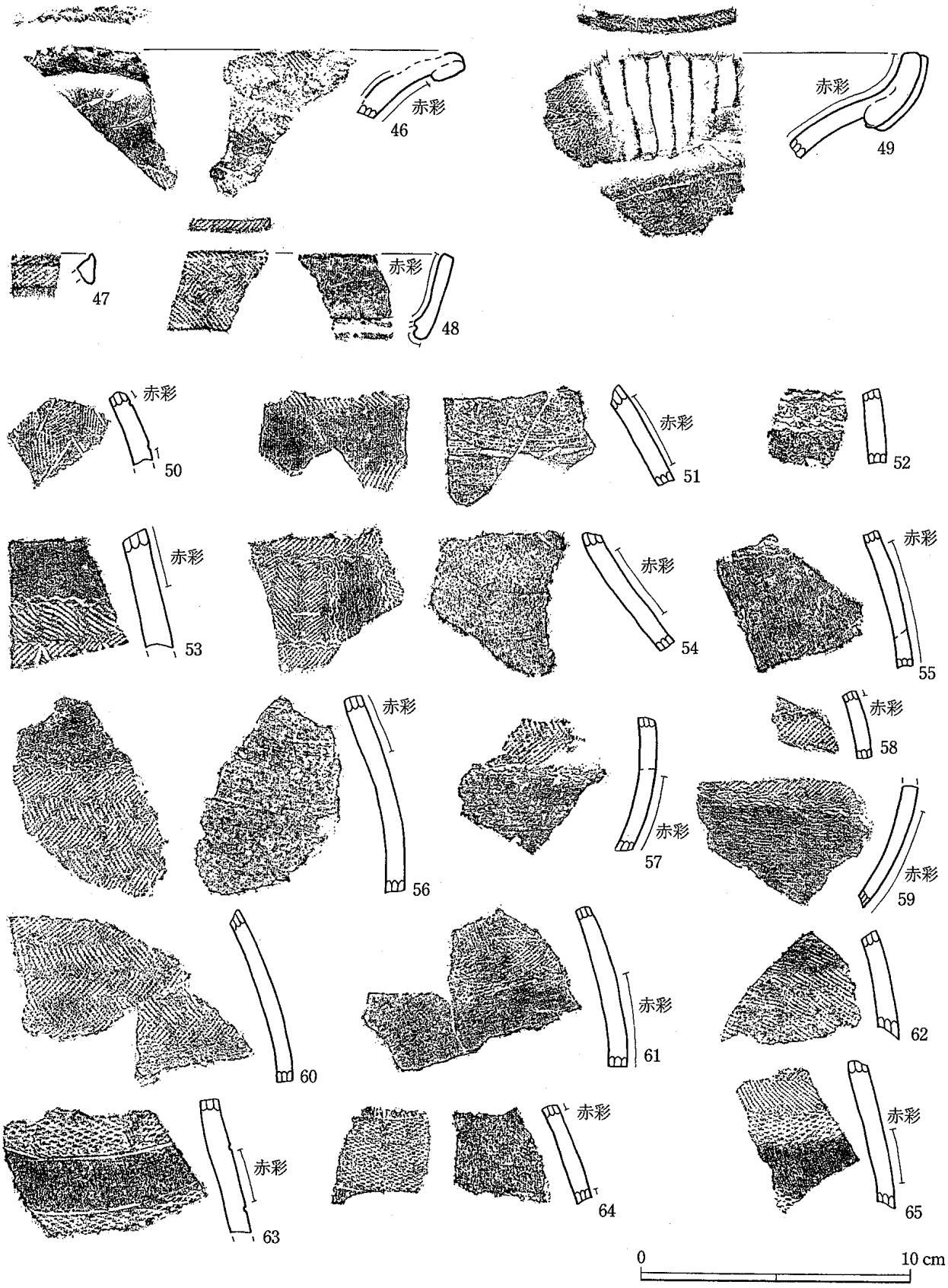
10、37～45、87は、甕形土器（以下、甕と略）である。10は底部破片である。



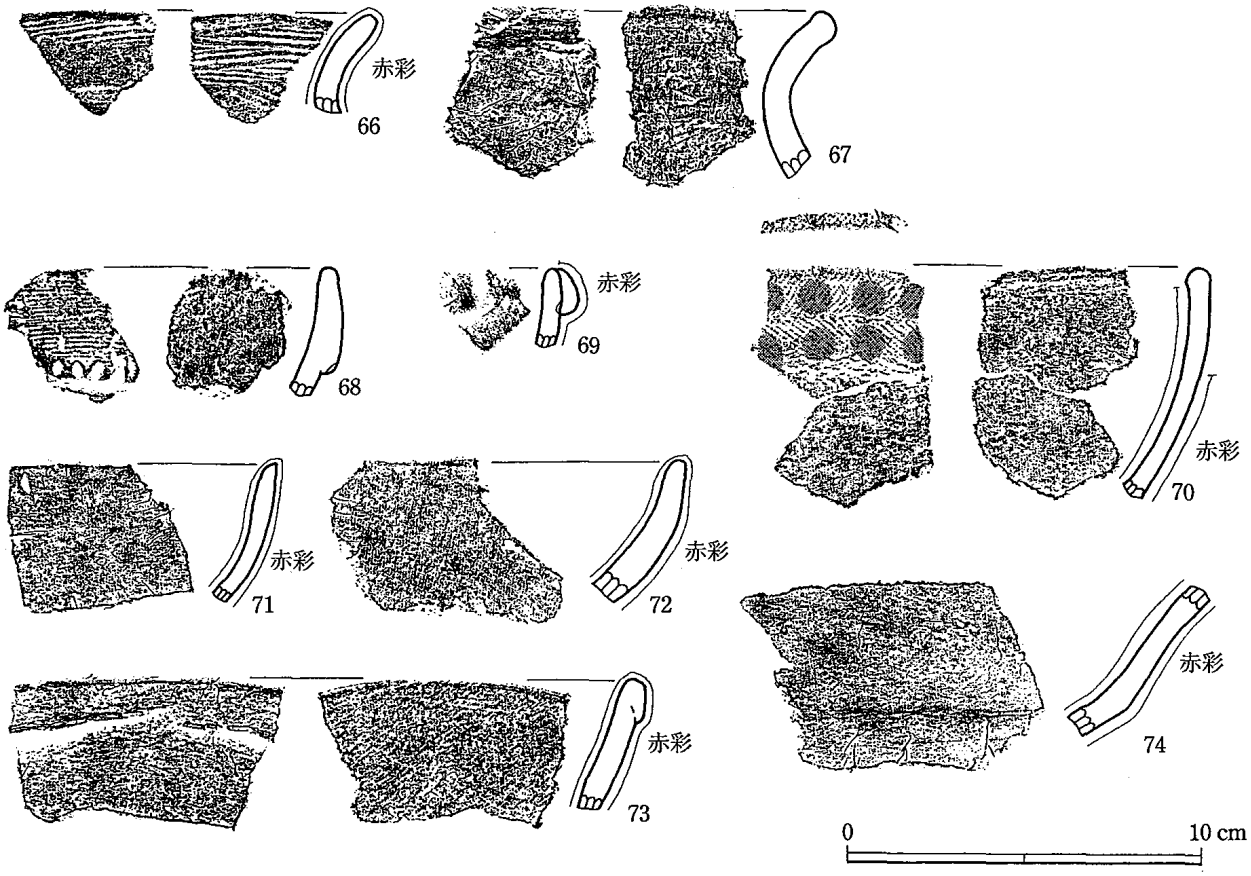
第8図　亀塚出土土器（5）

底から直線的に立ち上がる器形や、硬く焼きしめられた焼成から、後期朝光寺原式の可能性も考えられるが、厚めの器壁やミガキの特徴から、宮ノ台式と判断しておく。調整は、縦方向にナデに近いハケ目を入れた後、底面に近い部分を横方向に研磨している。

37～43は、口縁部破片。37～40は、口唇部に刻み目を加えるものである。37は、胴部に櫛描沈線による横羽状文が描かれ、口縁部内面には四条一単位の、いわゆる櫛目鎖状文をもつ。38は、弱く面取りした口唇部に、浅い刻みを施す。焼成は良好で比較的硬質である。ハケ目の鋭さや焼成から、後


赤彩
46
赤彩
49
47
赤彩
48
赤彩
50
赤彩
51
52
赤彩
53
赤彩
54
赤彩
55
赤彩
56
赤彩
57
赤彩
58
赤彩
59
60
赤彩
61
62
赤彩
63
赤彩
64
赤彩
65
0
10 cm

第９図　亀塚出土土器（６）



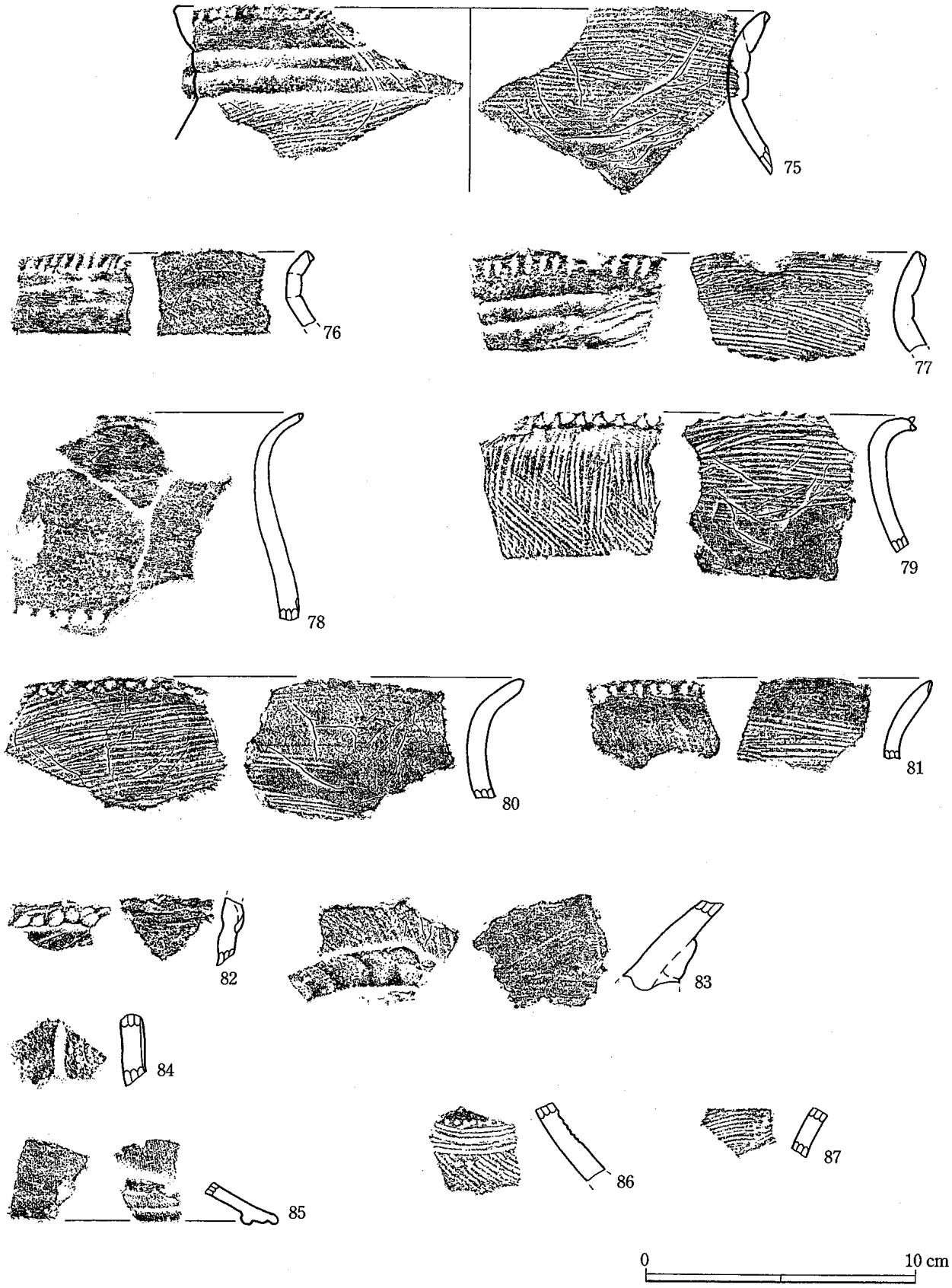
第10図　亀塚出土土器（7）

期の甕である可能性も捨てきれないが、直線的な器形や砂質の胎土から、宮ノ台式と判断した。39は、口唇部に明瞭な面取りを施し、外側よりハケ状工具による大ぶりな刻みを加えている。40は、面取りされた口唇部の上面から、刻み目を加えている。37を除いてハケは明瞭である。

41～43は指頭押捺をもつものである。42は、口唇部を断面凹字状に成形し、外側の口唇端部に押捺を加える。43は、口縁部外面に段をもち、大ぶりの指頭押捺が加えられる。

44・45は胴部破片。44には、櫛描沈線によるやや粗い横羽状文が密に描かれる。45はハケ目調整の無文甕である。87は、筆者の表採資料で、内面に横方向の明瞭なハケ目をもつ。頸部付近の破片であろう。

さて、これら中期後葉の資料のうち、口唇部内面に櫛目鎖状文をもつ37は、宮ノ台式古相、SiⅡ期（安藤一九九〇）以前に遡るものである。密な櫛描羽状文をもつ44は、SiⅠ期に遡る可能性がある。壺では、20が、池上式に後続するものであり、SiⅠ～Ⅱ期に並行すると考えられる。また、白岩式に近い櫛描文をもつ23～25は、SiⅡ期～Ⅲ期前半に位置



第11図　亀塚出土土器（8）

付けられるものである。28の結紐文なども、古い要素と考えていいだろう。

一方、SiⅢ期以降の要素としては、18のラッパ状に開いた口縁部の形態や、30・32～36にみられる無区画の細い帯縄文の存在が挙げられる。ただし、羽状縄文や無文部を研磨・赤彩するものが認められないため、宮ノ台式終末のSiⅤ期に下る土器は存在しないとみていい。一方、甕も、口唇部を面取りして刻みを施したものが多い点は、古い要素と考えられる。

本遺跡の宮ノ台式土器は、総じてSiⅠ期もしくはSiⅡ期からSiⅢ期の、古相の特徴をもっていると評価していいだろう。

・弥生時代後期

第4～5図、第6図11～16、第9～10図、第11図75～83は、後期の土器である。

3、11～14、46～67は、壺である。3は、小型の壺で、下部に弱い屈曲のある丸みを帯びた胴部をもつ。外面は赤彩され、横方向のミガキがかすかに認められる。内面は、最大径付近より上に横方向のミガキが加えられ、それより下は横方向に削られる。

11～14は底部破片である。11は、底面を一定方向に削って平らにしている。12は、やや突出する底部から大きく開くもので、大型の壺になるものと思われる。13は厚みをもった底部から大きく開く器形である。14の底部は、ドーナツ状に周縁を成形した後、中央に粘土を充填している。底面には、「井」の字状の鋭い線刻のようなものがあるが、調整時の擦痕の可能性もある。器面は、いずれもミガキで仕上げられる。

46～48は、口縁部破片である。46は、ラッパ状に大きく開く有段口縁をもち、外面口縁部端に円形竹管による刺突列を巡らす。口縁内面には、縄文帯をもつ。頸部付近には、沈線で区画された縄文帯が認められる。47は、口唇部と口縁部外面に縄文が施される。断面は三角形となる。48は、薄い粘土帯を貼り付け、外面に羽状縄文を加える。内面は赤彩される。49は、受口状の口縁で、外面に網目状撚糸文帯と細縄文帯を交互に重ねた後、無刻の棒状浮文を貼り付けている。

50～65は胴部破片。50は、沈線区画の山形文の一部である。縄文で山形文を描いた後に、細い沈線で区画する。51は、無区画の帯縄文を二帯重ね、間を赤彩し、研磨したものである。

52～61は、自縄結節文を有する資料である。無文部に赤彩が認められるものもある。52は、やや大ぶりの節をもち、結節文帯をやや幅広に数段に重ねている。53は、羽状縄文帯を施した後、上端を結節文で区画し、下端には沈線区画の山形文を加える。器面の湾曲が小さいことから、大形の個体になることが予想される。54は、二帯の縄文帯の間に羽状縄文による縦方向の短い縄文帯を加え、それぞれを結節文で区画する。縦帯間の無文部は赤彩、研磨している。54・55・57・58・60は、同一個体の可能性がある。55～60は、羽状細縄文帯の上端もしくは下端を結節文によって区画するものである。61はやや特異で、短い原体をランダムに転がした帯縄文の上下を結節文で区画したものである。62は、羽状細縄文帯を数段重ねているが、無区画である。

63～65は、網目状撚糸文をもつ資料である。63・64は、沈線区画の網目状撚糸文帯となる。65は、縄文帯を幅の広い網目状撚糸文帯で区画している。無文帯をはさみ、また網目状撚糸文帯の上部が見えている。

66・67は、広口壺の口縁部片である。いずれも無文で、66は内外面ともに赤彩される。

1・2、15・16、68～74は、高坏形土器・鉢形土器（以下、高坏・鉢と略す）である。

1は大形の高坏で、直線的に大きく開き口縁部が内湾する浅い鉢形の坏部に、ハの字形に開く脚部がつく。口縁部・脚台部下端に刻みをもつ段を形成する。胴・脚の境の屈曲部には、刻みを加えた隆帯がめぐる。坏部・脚台部ともに、ハケ調整がなされた後に、赤彩され、縦方向の入念なミガキで仕上げられる。坏部内面は、削るような強いナデの凹凸を残したまま、縦方向のミガキが加えられている。

2は高坏の脚台部で、1よりも鋭角的なハの字形を呈し下部に上下をよくなでつけられた断面三角形の隆帯がめぐる。その形態から、吉ヶ谷式土器である可能性もある。外面は、ハケの後赤彩され、入念なミガキで仕上げられている。

15・16は、鉢の底部破片である。いずれも赤彩の後にミガキが加えられ、焼成も良好である。形も均整がとれており、丁寧な作りである。16の底部は、ドーナツ状に周縁を成形した後、中央に粘土を充填している。

68～73は鉢の口縁部破片である。68、69は、粘土紐を貼り付けた段を有し、下端に刻みが加えられる。69は、段に瘤状の粘土粒が貼り付けられる。70は、羽状縄文帯

を自縄結節で区画し、赤彩による円文を二段加えている。71～73は、無文で内外面ともに赤彩された資料である。いずれも口唇部が弱く面取りされ、器面は赤彩の後、研磨される。73には粘土紐貼り付けによるわずかな段がみられ、吉ヶ谷式土器である可能性も考えられる。

74は高坏の坏部破片である。大きく開いた下半部から屈曲して立ち上がり、口縁部は外反する。器面は赤彩される。山中式か、箱清水式の高坏を模したものと考えられる。

4～7、75～83は甕である。4・5は台付甕の資料で、4は、くの字形にゆるく屈曲する頸部と、丸みをもった胴部を有する。口唇部には、ハケ状工具で浅く刻みを入れる。胴部全体に斜方向のハケを施した後、頸部付近を縦方向のハケで仕上げる。口縁部付近は内外面とも横ナデである。内面は頸部を中心に、広く横方向のハケ目が施され、胴部は板ナデである。今回、新たに口縁部破片が一点接合することが判明し、81も同一個体と考えられる。5は、脚台部の一部である。明瞭なハケが認められる。

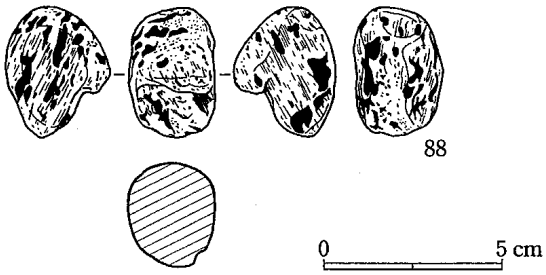
6・7は、甕の上半部分の大形破片である。6は、いわゆるナデ甕で、口唇部を面取りした後、外側から刻みが加えられる。内面は、頸部付近を中心に、広く横ミガキが加えられ、口縁部付近は、削るような強いナデが横方向に施される。7は、口唇部を面取りした後、上面に刻みを加えている。ナデに近い条の細かいハケが、胴部では斜めに、頸部付近では縦に施され、口縁部内外面は横ナデで仕上げる。胴部内面は板ナデで、頸部付近には横方向の明瞭なミガキを加えている。

75～81は口縁部破片である。75～78は、いわゆる輪積甕で、75～77は複数段、77は刻みを加えた一段の装飾をもつ。いずれも口唇部に刻みを加える。75は、胴部外面及び内面口縁部～頸部に明瞭なハケを有しており、76・77もこれに類するものと考えられる。いずれも輪積部分には横ナデが加えられている。

79・80は、口唇部に交互押捺を加えた甕である。79は、棒状工具による細かい押捺である。胴部に斜方向のハケを施した後、口縁部から頸部直下に縦方向の明瞭なハケを加える。内面は、口縁部～頸部に横方向の明瞭なハケを施す。80の押捺は、指頭で軽くつまんだような非常に浅いもので、押捺内に爪痕が残る。調整は内外面ともに横方向の明瞭なハケである。81は、口唇部に浅い刻みをもつ。4と同一個体と考えられる。

82は胴部破片で、布目のつく刻みを加えた段をもつ。83は、台付甕底部付近の屈曲部であろう。粘土帯がめぐり、指頭による押捺が加えられる。

さて、以上の弥生時代後期の土器は、いずれも後期中葉（松本完氏のⅢ期　松本一九八四・一九九三・一九九六）以後のものと考えられる。壺の文様には、中葉以降に特徴的な、羽状縄文帯を結節縄文で区画するものが目立っており、後葉・終末に盛行する網目状撚糸文や、48のような幅広の複合口縁もみられる。なお、63・64の網目状撚糸文を沈線で区画するものや、51の帯縄文間に縦方向の縄文帯を挟むもの、49、65の網目状撚糸文と帯縄文が組み合わさるものなどは、武蔵野台地東端で発達した文様と考えられる（安藤二〇〇八）。



第12図　亀塚出土石器

4のようなハケ甕も、口唇部の面取りが弱く刻みも浅い点から、中葉以降のものと判断でき、6や7のようなナデ甕も、胴部最大径が口径を凌ぐようであり、やはり後葉以降に下るものと考えてよいだろう。器形的に78が中葉以前に遡る可能性を有するが、器面の状態が悪いため判断ができない。

・石器および縄文時代・古墳時代の土器

88は、軽石製の砥石である。周囲に擦り面が認められる。弥生時代のものであろう。

84は、沈線区画の縄文をもち、無文部にはミガキが施される。縄文時代後期、称名寺式土器であろう。85は、須恵器の蓋で明瞭なロクロ目が認められる。7世紀代のものと考えられる。

三、弥生時代の三田台

先史時代の遺跡の大半が破壊されたと考えられる三田台でも、これまでの発掘による断片的な資料が蓄積されてきたことで（港区伊皿子貝塚調査団一九八一、港区教育委員会二〇〇四・二〇〇七、港区No. 101遺跡調査会一九九七ほか）、ようやく弥生時代の遺跡の内容を推測できるようになってきた。この点については、二〇〇五年に安藤広道氏によって総括的にまとめられており（安藤二〇〇五）、今回報告した資料も、その見解を概ね支

持するものと考えられる。

今回報告した資料のうち、弥生時代中期後葉の土器は、SiⅠ～Ⅱ期に遡る、宮ノ台式土器の古相を中心とするものであった。伊皿子貝塚の方形周溝墓出土土器は（港区伊皿子貝塚調査団一九八一）、SiⅡ期に平行するものと考えられる。また、桑山龍進氏による亀塚周辺採集資料（安藤・高山一九八六）も、SiⅡ期～SiⅣ期に位置づけられるものである。今回の資料によっても、三田台の宮ノ台式土器が、その古相を中心としたものであることが追認できたことになる。

伊皿子貝塚の出土土器が壺主体であるのに対し、亀塚及び亀塚周辺出土の土器には、甕が多く含まれている。これは、亀塚一帯に宮ノ台式期の居住域が存在し、伊皿子貝塚一帯に、その墓域が拡がっていたことを物語るものである。三田臺町遺跡調査区では、少量の宮ノ台式土器を含むⅤ字溝が確認されており（未報告、安藤二〇〇五）、弥生時代中期の三田台の集落が環濠集落であった可能性も指摘されている。ただし、宮ノ台式期の環濠集落の多くが、宮ノ台式期終末まで継続することからすると、古相の宮ノ台式土器が中心となる三田台の集落は、やや特異な展開を示す環濠集落であったことになる（安藤二〇〇五）。

一方、後期では、今回の報告資料を含め、今のところ三田台の遺跡において、初頭・前葉に遡る土器は確認されていない。三田台南端の三田臺町遺跡調査区では、後葉～終末期の住居址が検出されており（未報告、安藤二〇〇五）、港区No. 101遺跡でも、後葉～終末の土器が出土している（港区No. 101遺跡調査会一九九七）。これらのことから、弥生時代後期後葉には、三田台南端まで居住域が拡大していたことが想定できる。先述の三田臺町遺跡で検出されたⅤ字溝が、後期の集落に伴うことも考えられる。

安藤氏の指摘を繰り返せば、亀塚が存在する三田台の南側平坦面には、弥生時代中期後葉の宮ノ台式初頭～中葉と、後期中葉～終末に、比較的大きな集落が営まれていたことが推測され、そのうちどちらかは、環濠を伴う集落であったことになる。これらの集落は、三田台の西を流れる古川の谷底低地で水田を営んでいたと考えられる。

おわりに

冒頭で述べたように、先史時代の遺跡の残存率が低い

武蔵野台地東端では、破片資料や残骸となった遺構を頼りに、遺跡の全体像を復元していかなければならない。そこでは、ごく小さな資料が重要な意味をもつことがあり得るため、発掘調査報告においては、特に慎重な資料の取り扱いが求められる。そうした意味において、今回の再報告の意義は小さくないものと考えている。

最後に、報告までに時間がかかってしまったことをお詫びするとともに、港区教育委員会の高山優氏と、このような機会を与え、御指導してくださった安藤広道先生に、深く感謝申し上げる次第である。なお、本報告の後、資料は一括して港区教育委員会に返却する予定である。

本稿は、二〇〇六・二〇〇七年度学事振興基金「慶應義塾所有の国内出土考古資料の基礎的研究」（研究代表者安藤広道）の成果の一部である。

引用・参考文献

安藤広道　一九九〇　「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分」『古代文化』第四二巻第六・七号（財）古代学協会

安藤広道　二〇〇五　「三田台公園出土の弥生土器―2002年度状態確認調査時出土の土器について―」『研究紀要』8　港区教育委員会

安藤広道　二〇〇八　「東京湾西岸～相模川流域の後期弥生式土器の検討」『シンポジウム　南関東の後期弥生土器を考える　予稿集』関東弥生時代研究会・埼玉土器観会・八千代栗谷遺跡研究会

安藤広道・高山優　一九八六　「港区No. 35遺跡付近採集の土器―桑山龍進氏所蔵の資料―」『港郷土資料館館報』4　港区立港郷土資料館

清水潤三　一九七二　『東京都港区亀塚の調査』港区教育委員会

鳥居龍蔵　一九三五　「上代の芝に就いて」『武蔵野』第二二巻第三号　武蔵野会

松本　完　一九八四　「弥生時代～古墳時代初頭の遺構と遺物について」『横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書No. 6遺跡―Ⅳ　1983年度』横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査団

松本　完　一九九三　「南関東地方における後期弥生土器の編年と地域性」『翔古論聚』久保哲三先生追悼論文集刊行会

松本　完　一九九六　「出土土器の様相と集落の変遷」『早稲

田大学安部球場跡地埋蔵文化財調査報告書　下戸塚遺跡の調査　第2部　弥生時代から古墳時代前期』早稲田大学
港区　一九六〇　『港区史』上
港区伊皿子貝塚調査団　一九八一　『伊皿子貝塚遺跡』
港区教育委員会　二〇〇四　『港区埋蔵文化財調査年報1—平成14年度の調査他—』
港区教育委員会　二〇〇七　『港区埋蔵文化財調査年報4—平成17年度の調査—』
港区No. 101遺跡調査会　一九九七　『三田臺町・三田臺裏町・芝伊皿子臺町町屋跡遺跡』港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告24
港区役所　一九八〇　『新修　港区史』

法量	文様・装飾・特徴	調整	既報告
口径：27.2 cm 底径：14.0 cm 高さ：20.7 cm	有段口縁の下端に刻み目。くびれ部に細い隆帯をめぐらし、刻み目。脚台部の下端を口縁と同様有段とし、刻み目。内外面全体に赤彩。一部に黒斑あり。	外面、５本単位のハケ→細かい縦ミガキ。内面横ケズリ→横ハケ→縦ミガキ。台部内面ナデ。	●
残存高：8.7 cm	ハの字状に鋭角に立ち上がる脚台部。下端付近に上下をなでつけられた隆帯がめぐる。外面全面赤彩。	外面、縦ハケ→赤彩→縦ミガキ。内面板ナデ。下端付近、外面横ナデ、内面ハケ。	
胴部最大径(推定)：15.6 cm 残存高：8.5 cm	外面全面無文・赤彩。ただし摩滅気味で痕跡的に残る程度。胴部最大径～下半部の辺りに微かな屈曲部あり。二次焼成を受けている。	外面、赤彩→横ミガキが痕跡的に残る。内面、胴部最大径より上半が横ミガキ、下半がケズリ。	
口径：19.9 cm 残存高：22.2 cm	口縁部は丸味を帯び、外方から板状工具で、左から右方向に向かって浅い刻み目。胴部最大径より上半にススの付着。	胴部外面横ハケ→口縁部から頸部にかけて縦ハケ。口縁部横ナデ。台部は縦ハケ。内面は横ハケ→ナデ。台部内面は板ナデ。	●
残存高：3.4 cm	器厚の均一な安定した脚台部。内面下端がやや突出する。	外面、ハケの後板ナデ。内面、板ナデ。	
口径(推定)：24.6 cm 残存高：9.8 cm	口縁部を面取りした後、ヘラ状工具による刻み目。二次焼成を受けている。	外面胴部上半部に明瞭な擦痕、全面的にナデ。口縁部直下に棒状工具で横方向にナデつけ。口縁部内面横ナデ、明瞭な擦痕あり。頸部内面とその上下付近、横ミガキ。以下横ナデ。	
口径(推定)：20.6 cm 残存高：11.3 cm	口唇部を面取りした後、上方から棒状工具による刻み目。内面に輪積み痕が残る。	外面、胴部に横方向のナデのようなハケ→口縁部～頸部に縦方向の同様のハケ→口縁部横ナデ。内面、胴部に板ナデ→口縁部ハケ目・ナデ→頸部横ミガキ。	
残存高：4.7 cm	突出する底部。二次焼成を受けているか？	外面縦方向のややランダムなミガキ。内面剥落気味。	
残存高：2.5 cm	突出する底部。	外面縦方向のハケ。内面ナデ→ややランダムなミガキ。底面ケズリ→ミガキ。	
残存高：5.2 cm	直線的に立ち上がる底部。	外面縦方向のナデのようなハケ目の後、底面付近を横ミガキ。内面縦・横方向にややランダムなミガキ。底面入念なミガキ。	
残存高：5.7 cm	安定した底部から外方に大きく開く。外面赤彩。	外面赤彩→横ミガキ。内面ナデケズリだが、剥落気味。	
残存高：3.1 cm	安定した底部から外方に大きく開く。底面に木葉痕。	外面軽いハケ目→ミガキ。内面同心円状に粗いハケ目。剥落気味。	
残存高：2.3 cm	安定した底部から外方に大きく開く。	外面ハケ目→ミガキ。内面棒状工具によるナデ？底面ケズリ→ミガキ。	
残存高：2.0 cm	底部から直線的に開く。底部はドーナツ状に周縁を作ったのち、中央を充填する技法。底面に「井」字状の線刻？	外面赤彩→縦方向ミガキ。内面赤彩→ミガキ。	

表１　亀塚出土遺物観察表

No.	出土位置	出土年月日	時期	器種	残存状態	焼成	胎土	色調
1	E 7 盛土-黒土層境界	1971.11.18.	弥生後期	高坏	2/3 残存	良好	橙色の微粒子、白色雲母多含。緻密。	明褐色
2	E 8 黒土層	1971.11.17.	弥生後期	高坏	破片 脚部のみ	良好	砂粒多含。 緻密。	白味の明褐色
3	E 5 黒土層	1971.11.15.	弥生後期	小型壷	1/8 残存 胴部以下のみ (底部欠損)	不良	白・黒・橙色粒子含。 粗。	白味の明褐色 (内部：灰褐色)
4	E 7 盛土-黒土層境界	1971.11.21.	弥生後期	台付甕	2/3 残存 (脚台分欠損)	良好	粗粒多含。 密。	にぶい茶褐色
5	S 6·7 表土	—	弥生後期	台付甕	破片 脚台部	良好	白・赤褐色粒子含。	赤味の明褐色。
6	E 5 黒土層	1971.11.20.	弥生後期	甕	破片(やや大) 口縁部～胴部上半	やや不良	白・橙褐色粒子含。密。	橙褐色 (内面：暗褐色)
7	E 7 黒土層	1971.11.18.	弥生後期	甕	破片(やや大) 口縁部～胴部	良好	透明鉱物含。 橙・白色粒子含。密。	にぶい明褐色
8	E 8 黒土層	1971.11.17.	弥生中期	壷	破片 底部	やや不良	白色微細粒子・雲母含。 やや粗。	暗褐色～黄褐色
9	E 5-E 8 表土	—	弥生中期	壷	破片 底部	良好	雲母・微細粒子多含。緻密。	くすんだ明褐色
10	E 8	1971.11.13.	弥生中期	甕	破片 底部	良好	白・赤色微細粒子・雲母含。 密。	暗褐色～黒褐色 (内面：赤褐色)
11	E 7 黒土層	1971.11.18.	弥生後期	壷	破片 胴部～底部	やや不良	橙・灰色粒子多含。透明鉱物・植物質繊維含。やや粗。	白褐色 (内面：黄褐色)
12	E 5 黒土層	1971.11.15.	弥生後期	壷	破片 底部	やや不良	砂粒多含。粗。	赤味の暗褐色
13	表採	1971.11.24.	弥生後期	小型壷	破片 底部	やや不良	橙・灰・白色粒子含。密。	赤味の明褐色
14	E 8 黒土層	1971.11.14.	弥生後期	小型壷	破片 底部	やや不良	黒・白・橙色の砂粒含。やや粗。	外面ススにより黒褐色 (内面：橙褐色)

残存高：2.0 cm	やや突出する底部と薄い器壁をもつ。内外面ともに赤彩。	外面赤彩→縦方向ミガキ。内面赤彩→ややランダムなミガキ。	
残存高：2.6 cm	やや丸みをもって立ち上がる。底部はドーナツ状に周縁を作ったのち、中央を充填する技法。内外面ともに赤彩。	外面赤彩→横方向のややランダムなミガキ。内面ハケ→赤彩→縦・横方向のややランダムなミガキ。	
残存高：3.0 cm	口唇部面取りの後、LR 縄文。	外面縦方法粗いハケ。内面ハケ→口縁付近ナデ。	
残存高：2.7 cm	口唇上端が受口状に短く屈曲するラッパ状の口縁。口縁外面に RL 細縄文。	外面、縦方向ナデ。内面横方向ハケ→ナデ。	
残存高：3.7 cm	やや袋状を呈する口縁。口唇部がやや薄く成形されている。無文。	外面、縦方向ハケ。内面に輪積み痕。	
残存高：3.5 cm	２本単位の工具による４条の太めの沈線→その上下に、棒状工具で、右→左方向に刺した刺突列。	内面剥落。ミガキか？	
残存高：1.2 cm	外面に横方向の刺突列。	外面に明瞭なハケ。	
残存高：3.2 cm	指先でつまんで作出した尖った隆帯。その上下にそれぞれ３条単位の櫛描波状文。	外面、地に細かいハケ。内面ナデ。	
残存高：3.7 cm	４本単位の櫛描条線による波状文と横線。文様帯の下端にハケ状工具による刺突列。二次焼成を受けている。	不明。内面に輪積み痕。	
残存高：3.0 cm	３本単位の櫛描文を連孤状に２段重ねている。	外面、文様の後に軽いミガキ。内面、明瞭なケズリ。	
残存高：4.8 cm	12本単位の細かい櫛描横線を多段に重ね、右端をすべて止めている。	—	
残存高：4.1 cm	山形に区画した中を、４本単位のヘラ描き沈線で充填。山形文の一部と思われる。	内面横ナデ	
残存高：4.2 cm	５本単位の櫛描条線による山形文→下端に横線。	外面、ナデ。	
残存高：3.8 cm	無節Ｌ縄文を沈線区画する。結紐文の一部。	外面、斜め方向の細かいハケ目。内面、明瞭なケズリ。	
残存高：4.3 cm	無区画の細縄文。横帯の一部と斜縄文帯が見え、結紐文か山形文と思われる。	外面ミガキ。内面は剥落気味だがミガキ。輪積み痕あり。	
残存高：5.5 cm	２帯の RL 縄文を描いたのち、さらに中央をナデ消している。内面二次焼成を受けている。	外面、地に縦方向のハケ。内面、横方向のハケ、一部ナデ。	
残存高：2.3 cm	RL 縄文。	—	

15	E 5 黒土層	1971.11.20.	弥生後期	鉢	破片 底部	良好	白・橙・灰色粒子含。やや粗。	白味の明褐色（内部：灰色）
16	E 8 黒土層	1971.11.14.	弥生後期	鉢	破片 底部	良好	雲母含。密。	白褐色
17	E 7 黒土層	1971.11.18.	弥生中期	壷	破片 口縁部	良好	透明鉱物・黒色雲母含。細砂粒多含。緻密。	明褐色
18	E 5-E 8 表土	—	弥生中期	壷	破片 口縁部	やや不良	2mm～4mm大の砂粒含。雲母含。	橙褐色
19	E 8 黒土層	1971.11.17.	弥生中期	壷	破片 口縁部	やや不良	細砂粒多含。	灰色味の明黄褐色
20	S 6·7 表土	—	弥生中期	壷	破片 胴部上半部の一部	やや不良	細砂粒多含。	暗めの橙褐色（内面：白っぽい暗褐色）
21	S 6·7 表土	—	弥生中期	壷	破片 頸部	やや不良	黒色雲母含。	白味の橙褐色
22	E 8 黒土層	1971.11.14.	弥生中期	壷	破片 頸部	不良	細砂粒多含。雲母含。	明褐色
23	E 7 P 2	1971.11.21.	弥生中期	壷	破片 胴部	不良	細砂粒多含・乳白色鉱物含。	白味の橙色（内部：緑味の灰色）
24	E 5-E 8 表土	—	弥生中期	壷	破片 胴部	良好	細砂粒多含。砂粒含。	黒色（内面：黄褐色）
25	E 7 黒土層	1971.11.18.	弥生中期	壷	破片 胴部	やや不良	細砂粒多含。白色雲母含。	黄褐色（内面：黒色）
26	S 6 黒土層	—	弥生中期	壷	破片 頸部～胴部	やや良好	細砂粒多含。砂粒含。	黒色（内部：白味の黄褐色）
27	E 7 黒土層	1971.11.18.	弥生中期	壷	破片 胴部	やや不良	細砂粒多含。白色微粒子含。	白味の黄褐色
28	S 6 黒土層	—	弥生中期	壷	破片 胴部	やや不良	細砂粒多含。微細な白色粒子含。	黒色（内部・内面：赤味の褐色）
29	E 5 黒土層	1971.11.16.	弥生中期	壷	破片 胴部	やや不良	白色微粒子含。細砂粒多含。透明鉱物少量含。	暗黒褐色
30	表採	1971.11.24.	弥生中期	壷	破片 頸部～胴部	良好	砂粒・雲母多含。	白味の明褐色（内面：橙色）
31	E 5 黒土層	1971.11.15.	弥生中期	壷	破片 胴部	やや不良	細砂粒多含。乳白色鉱物含。	白褐色

残存高：2.3 cm	LR 縄文。二次焼成を受けている。	—	
残存高：3.9 cm	RL 縄文を 2 段重ねている。二次焼成を受けているか？	—	
残存高：3.2 cm	RL 縄文。	外面、地にハケ。内面、ナデケズリ。	
残存高：1.6 cm	LR 縄文。	内面、ナデ。	
残存高：1.8 cm	LR 縄文。	内外面ともに、ナデ。	
残存高：2.4 cm	外面に 4 本単位の羽状文。内面にも同様の工具で 4 本単位の櫛目鎖状文。	外面ナデ、わずかにミガキの痕跡。内面、ナデ。	
残存高：4.3 cm	口唇部は斜めにやや面取りされ、外方から刻み目。直線的であまり開かない器形。	外面、横→縦→斜め方向ハケ。内面は横方向ハケ。	
残存高：2.0 cm	角棒状の口縁部にハケ状工具による大き目の刻み目。	外面、斜め方向のハケ。内面、横方向のハケ。	
残存高：3.1 cm	口唇部面取りの後、刻み目。口縁部はやや屈曲して開く。	外面、縦(斜め)方向のハケ。内面、口縁部屈曲部以上を横方向のハケ。口唇部ハケ。	
残存高：3.3 cm	角棒状の口縁部。指頭押捺は、外側からの力が強く、内側からがやや弱い。	外面、斜め方向のナデ。内面、横方向ナデ。	
残存高：3.3 cm	凹字状の口唇部。外側から細かい指頭押捺(爪の後残る)を加える。	外面、斜め方向のハケ。内面横方向ナデ。	
残存高：4.6 cm	口縁部外面に段を成形。口縁部は明瞭な指頭押捺。	外面段上は横方向ハケ、下は縦方向ハケ。内面は横方向ハケ。いずれも指頭押捺の前。	
残存高：4.2 cm	櫛歯状工具による密な羽状文の一部と思われる。	外面、ハケ。内面、斜め方向ナデ、縦方向部分的なミガキ。	●
残存高：9.6 cm	無文。上端は擬口縁か？	外面、斜め方向のハケ。内面、ヘラケズリのナデのようなハケ。	
残存高：3.5 cm	ラッパ状に開く、粘土帯貼り合わせの口縁。口唇部 RL 細縄文。口縁部内面に RL 縄文。外面口縁部端に円形の刺突列。胴部に沈線区画の縄文帯をもつ。内外面ともに無文部は赤彩。	赤彩部分はすべてミガキ。内面剥落気味で詳細不明。	
残存高：1.1 cm	断面三角形の口縁。外側に LR 細縄文。	—	
残存高：3.2 cm	幅広の複合口縁。外面に羽状細縄文。口唇部は面取りし、LR 細縄文。内面赤彩。	内面は入念にミガキ。下端の突出部はナデ？	

32	E 8 黒土層	1971.11.14.	弥生中期	壷	破片 胴部	不良	細砂粒多含。 雲母含。	橙褐色
33	E 5 黒土層	1971.11.20.	弥生中期	壷	破片 胴部	不良	細砂粒多含。	赤褐色。
34	E 5-E 8 表土	—	弥生中期	壷	破片 胴部	不良	砂粒多含。細砂粒含。	白味の黄褐色
35	S 6·7 表土	—	弥生中期	壷	破片 頸部～肩部の屈曲部分	良好	白色微粒子含。	褐色(一部赤褐色)
36	E 8 黒土層	1971.11.14.	弥生中期	壷	破片 胴部	良好	細砂粒多含。 砂粒含。	灰褐色(内部：赤味の褐色)
37	S 6·7 表土	—	弥生中期	甕	破片 口縁部のみ (口わずかに生きている)	やや不良	白色粒子多含。	暗黒褐色
38	S 6 黒土層	—	弥生中期	甕	破片 口縁部	非常に良好	細砂粒多含。 微細な白色雲母含。緻密。	黄褐色(内面：赤褐色)
39	表採	1971.11.24.	弥生中期	甕	破片 口縁部	良好	細砂粒多含。	白味の明褐色
40	E 5-E 8 表土	—	弥生中期	甕	破片 口縁部	良好	細砂粒多含。 白色粒子・黒色鉱物含。	黄褐色
41	S 6 黒土層	—	弥生中期	甕	破片 口縁部	良好	黒色雲母多含。	暗褐色
42	E 8 黒土層	1971.11.14.	弥生中期	甕	破片 口縁部	良好	細砂粒多含。 砂粒含。	灰色味の明褐色
43	S 6 黒土層	—	弥生中期	甕	破片 口縁部	非常に良好	細砂粒多含。 微細な雲母含。 乳白色粒子含。 緻密。	黒色(内部：黄褐色)
44	E 5-E 8 表土	—	弥生中期	甕	破片 胴部	非常に良好	砂粒含。粘土塊含。	暗褐色(内面：赤褐色)
45	E 8	1971.11.13.	弥生中期	甕	破片 胴部	良好	細砂粒多含。 黒色・白色微細粒子含。	白味の橙褐色
46	E 7 黒土層	1971.11.18.	弥生後期	壷	破片 口縁部	良好	明褐色の粒子・透明鉱物・乳白色鉱物含。	明黄褐色
47	E 8 黒土層	1971.11.14.	弥生後期	壷	破片 口縁部	良好	1mm未満の白色粒子含。	明黄褐色
48	E 5 黒土層	1971.11.15.	弥生後期	壷	破片 口縁部	良好	灰色微粒子含。 緻密。	白味の褐色

残存高：4.0 cm	受け口状口縁。口唇部は面取りの後 RL 縄文。外面、LR 細縄文、網目状撚糸文を交互に施文。後、少なくとも 7 本の棒状浮文を貼りつける。内面赤彩。	—	
残存高：2.8 cm	沈線区画の山形文の一部。縄文は RL・LR の 2 種類。縄文で山形文を描いた後、沈線で区画。区画の外は赤彩。	外面、赤彩→ミガキ。内面、横方向ナデ。	
残存高：3.8 cm	LR・RL 細縄文による 2 種類の横帯をもつ。上段の下端にはかすかに S 字状結節文をもち、横帯間は無文、赤彩とする。	外面、赤彩→ミガキ。内面、ナデのようなきめの細かいハケ目。	
残存高：2.8 cm	太めの自縄結節文。	外面、無文部はミガキ。	
残存高：4.5 cm	羽状縄文帯を描いた後、上端を S 字状結節文で区画し、下端には沈線区画の山形文を加える。無文部赤彩。	外面、ハケ→赤彩。内面ナデケズリ。	
残存高：4.5 cm	細縄文の横帯・縦区画帯を描いた後、自縄結節 2 段で区画。縦区画結節→横区画結節。無文部赤彩。55・57・58・60と同一個体の可能性あり。	外面は赤彩→縦方向ミガキ。内面ナデケズリ。	
残存高：5.2 cm	S 字状結節文以下無文、赤彩。54・57・58・60と同一個体の可能性あり。	外面、ナデ→赤彩。内面、横ナデ。	
残存高：7.3 cm	羽状細縄文を 5 段施した後、上端を 3 段の自縄結節文で区画。無文部赤彩。	内面、横方向に板ナデ。	
残存高：4.9 cm	羽状細縄文帯を描いた後、下端を S 字状結節文 2 段で区画。無文部は赤彩。54・55・58・60と同一個体の可能性あり。	外面、無文部赤彩→ミガキ。内面、横方向板ナデ。	
残存高：2.6 cm	LR 細縄文を施した後、上端(もしくは下端)を自状結節文で区画。54・55・57・60と同一個体の可能性あり。	—	
残存高：4.7 cm	細縄文帯を描いた後、下端を 3 段の自縄結節文で区画。以下、無文部赤彩。	外面、赤彩→ミガキ。内面は縦ナデ→横板ナデ。	
残存高：6.6 cm	細縄文を羽状に 5 段施した後、下端を 4 段の自縄結節文で区画。54・55・57・58と同一個体の可能性あり。	内面板ナデ。	
残存高：6.0 cm	原体の短い細縄文をランダムに転がした後、下端を S 字状結節文で区画。無文部赤彩。	外面、赤彩→ミガキ。内面板ナデ。	
残存高：4.1 cm	RL 細縄文。	外面、縄文施文の後横ナデ。内面、板ナデ。	
残存高：5.0 cm	網目状撚糸文帯を 2 帯描いた後、下端及び上端を沈線で区画し、後、間を赤彩、ミガキとする。	外面、沈線区画→赤彩→ミガキ。内面、横方向ケズリ。	

49	E 3 黒土層	—	弥生後期	壷	破片 口縁部	やや不良	砂粒・雲母含。全体に砂質。	白味の明褐色
50	E 8 黒土層	1971.11.17.	弥生後期	壷	破片 胴部	やや不良	橙色・白色微粒子含。	黄褐色（一部、赤褐色）
51	E 5 黒土層	1971.11.20.	弥生後期	壷	破片 頸部～胴部	非常に良好	1mm未満の橙色粒子含。炭？含。細砂粒含。	白味の褐色 （内面：暗褐色）
52	E 5-E 8 表土	—	弥生後期	壷	破片 胴部	不良	砂粒多含。細砂粒含。	白味の黄褐色
53	E 3 黒土層	—	弥生後期	壷	破片 胴部	やや不良	2mm～3mm大の赤褐色粒子含。白･灰･黒色粒子含。透明鉱物含。	白褐色
54	E 5 黒土層	1971.11.20.	弥生後期	壷	破片 頸部	良好	2mm～1mm程の橙色の粒子多含。黒色粒子含。	白味の黄褐色
55	E 8 黒土層	1971.11.14.	弥生後期	壷	破片 胴部	良好	赤色・白色粒子含。黒色雲母多含。	白味の黄褐色。
56	E 5 黒土層	1971.11.20.	弥生後期	壷	破片 胴部	良好	3mm大の橙色粒子多含。	赤味の黄褐色
57	E 8 黒土層	1971.11.14.	弥生後期	壷	破片 胴部	良好	～4mmの橙色粒子含。白色粒子少量含。	白味の黄褐色
58	E 8 黒土層	1971.11.14.	弥生後期	壷	破片 胴部	非常に良好	2mm未満の橙色の粒子含。黒色粒子含。	白味の黄褐色
59	E 5 黒土層	1971.11.20.	弥生後期	壷	破片 胴部	非常に良好	2mm未満の橙色の粒子多含。緻密。	濃い黄褐色
60	E 5 黒土層	1971.11.15.	弥生後期	壷	破片 胴部	非常に良好	2mm大の橙色・灰色粒子含。	白味の黄褐色
61	E 5 黒土層	1971.11.16.	弥生後期	壷	破片 胴部	非常に良好	2mm大の橙色粘土少量含。	白味の黄褐色
62	E 7 黒土層	1971.11.18.	弥生後期	壷	破片 胴部	非常に良好	橙色・赤褐色粒子含。黒色鉱物含。	黄褐色
63	E 8 黒土層	1971.11.14.	弥生後期	壷	破片 胴部	良好	褐色粒子多含。透明鉱物含。	黄褐色

残存高：3.7 cm	３段の網目状撚糸文帯を描いた後、上下端を沈線で区画、後、区画外は赤彩する。	内面、板ナデ？	
残存高：5.6 cm	羽状細縄文帯を描いた後、下端に網目状撚糸文帯を描く。無文部を挟んで、網目状撚糸文帯を描く。後、無文部を赤彩、ミガキとする。	赤彩→ミガキ。内面、板ナデか？	
残存高：2.9 cm	口唇部は丸みを帯びるがわずかに面取りする。全体に無文赤彩。	内外面とも横ハケ→赤彩。	
残存高：4.8 cm	丸みを帯びる口唇部をもち、全面無文。	内外面ともに、ナデ→ミガキ。	
残存高：3.7 cm	折り返し口縁の下端に刻み目。口唇部面取り。	外面地に明瞭なハケ目。内面板ナデ→ミガキ？	
残存高：2.2 cm	口縁部に段をもつ。段部下端を刻む。→こぶ状の突起を貼りつけ。外面赤彩。	不明	
残存高：6.5 cm	丸みを帯びる口唇部に LR 縄文。S 字状結節文区画の羽状細縄文、以下無文赤彩。２段、縄文部分に等間隔に円形朱文あり。内面は全面無文赤彩。	赤彩→横ミガキ。	
残存高：3.9 cm	内外面ともに全面無文・赤彩。口唇部面取り。	外面横ミガキ。内面ナデ。	
残存高：4.0 cm	内外面ともに全面無文・赤彩。口唇部面取り。	外面赤彩→ミガキ。内面赤彩→ミガキ。	
残存高：3.7 cm	口唇部面取り。折り返し口縁だが、段が一部段がなで付けられている。全面無文、赤彩。	赤彩部分ミガキ。	
残存高：4.3 cm	下方が明瞭に屈曲し、稜をもつ。内外面とも、全面無文、赤彩。	内外面ともに、ナデ→赤彩→ミガキ。	
残存高：6.1 cm	３段の明瞭な輪積み痕。口唇部は斜めに面取りした後刻み目。	外面、輪積み部ナデ、胴部明瞭なハケ。内面、横ハケ目。ただし胴部までは及ばない。	●
残存高：2.9 cm	３段の明瞭な輪積み痕。口唇部は斜めに面取りした後、先端が鋭角な板状工具で刻み目。	外面、横ナデ。内面横ナデ。	
残存高：3.8 cm	明瞭な輪積み痕を残し、口唇部はやや面取りした後、木口状の刻み目を加える。	外面は、輪積み部指ナデ。鋭利な工具によるなでつけ痕あり。内面横ハケ。	●
残存高：7.7 cm	口唇部に刻み目。同部に刻み目のある段を一段もつ。	内面、横方向ケズリ。	

64	S 6·7 表土	—	弥生後期	壷	破片 胴部上半部の一部	良好	細砂粒含。	橙褐色
65	E 7 黒土層	1971.11.18.	弥生後期	壷	破片 胴部	非常に良好	1mm未満の赤褐色・白色粒子含。細砂粒含。緻密。	黄褐色
66	E 5 黒土層	1971.11.15.	弥生後期	広口壺	破片 口縁部	良好	橙色の粒子、微細な白色粒多含。	明褐色
67	E 7 黒土層	1971.11.18.	弥生後期	広口壺	破片 口縁部	良好	砂粒含。	橙褐色
68	E 7 黒土層	1971.11.18.	弥生後期	鉢	破片 口縁部	非常に良好	1mm大の橙色・赤褐色粒子含。	白味の黄褐色
69	E 8 黒土層	1971.11.14.	弥生後期	鉢	破片 口縁部	良好	白・黒・赤色微粒子多含。	明褐色
70	E 7 黒土層	1971.11.18, 19.	弥生後期	鉢	破片 口縁部	良好	白色・象牙色粒子多含。	明褐色（内部：灰褐色）
71	E 5 黒土層	1971.11.16.	弥生後期	鉢	破片 口縁部	非常に良好	1mm大の白色粒子・雲母含。	白味の黄褐色（内面：白味の灰褐色）
72	E 5 黒土層	1971.11.20.	弥生後期	鉢	破片 口縁部	良好	2mm大の橙色・赤褐色粒子含。細砂粒多含。	濃い黄褐色
73	E 8 黒土層	1971.11.14.	弥生後期	鉢	破片 口縁部	良好	白・赤褐色の粒子含。緻密。	明褐色
74	E 5-E 8 表土	—	弥生後期	高坏	破片 胴部	非常に良好	細砂粒·砂粒·炭化物含。緻密。	黄褐色（内部：暗褐色）
75	E 7 黒土層	1971.11.18.	弥生後期	甕	破片 口縁部	良好	橙色粒子・雲母・乳白色鉱物含。	明黄褐色（外面、スス付着のため黒色）
76	E 8 黒土層	1971.11.14.	弥生後期	甕	破片 口縁部	良好	白色粒子含。	暗褐色
77	E 5 黒土層	1971.11.16.	弥生後期	甕	破片 口縁部～頸部の一部	良好	細かい黒色雲母含。透明の鉱物含。	白味の暗褐色
78	E 8 黒土層	1971.11.14.	弥生後期	甕	破片 口縁部	不良	橙色・赤褐・灰色色粒子含。砂質。	白味の褐色

残存高：5.1 cm	口唇部、面取りの後、明瞭な交互押捺。	外面は縦ハケ→斜めハケ。内面は屈曲部に横ハケ、胴部ケズリ。	●
残存高：4.5 cm	口唇部、指先による細かい交互押捺。	外面、細くて鋭いハケ。内面、ケズリ→ハケ→ミガキ。口縁部内面横ナデ。	●?
残存高：3.0 cm	薄い口唇部にハケ状工具で刺突。4と同一個体の可能性あり。	外面縦方向ハケ。内面頸部付近を横ハケ。	
残存高：2.6 cm	布圧痕による刻み目をもつ段部。	外面、ハケ？内面、横ハケ。	
残存高：3.3 cm	屈曲部に粘土帯を貼りつけた後、指頭押捺。	外面、ハケ。内面、板ナデ。	
残存高：2.7 cm	沈線区画の RL 縄文。	無文部ミガキ。	
残存高：1.5 cm	—	ロクロ目。	
残存高：3.0 cm	RL 縄文の上端を、3本単位の櫛描横線6条で区画。その上に円形の刺突列。	内面、ナデ？	
残存高：1.9 cm	—	内面、横ハケ。	
残存高：3.7 cm 残存幅：2.4 cm	部分的に面取り。	—	

79	E 5 黒土層	1971.11.15.	弥生後期	甕	破片 口縁部～胴部 上半の一部	良好	砂粒多含。	黒褐色 (内部・内面： 明黄褐色)
80	E 5-E 8 表土	—	弥生後期	甕	破片 口縁部	非常に良好	1.5 mm 大の 砂粒含。白色 雲母含。	褐色(一部赤褐 色)
81	E 7 P 2	—	弥生後期	甕	破片 口縁部	良好	2 mm 未満の 橙色・赤褐色 粒子含。	黒色 (内部：明 褐色)
82	E 7 黒土層①	1971.11.21.	弥生後期	甕	破片 胴部	良好	白色微細粒子 含・透明鉱物 含。	黒色 (内面：赤 褐色)
83	E 7 P 2	—	弥生後期	甕	破片 胴部・脚台部 屈曲部分	良好	白色微細粒子 含。砂粒含。	白味の褐色
84	E 5-E 8 表土	—	縄文後期	深鉢	破片 胴部	やや不良	透明鉱物含。	白味の褐色 (内面：赤味の 褐色)
85	E 5-E 8 表土	—	7 C 代	蓋	破片 口縁部	非常に良好	緻密。	白味の灰色
86	表採	2006.10.17.	弥生中期	壷	破片 頸部～胴部	良好	細砂粒多含。	赤味の黄褐色 (内面灰褐色)
87	表採	2006.10.17.	弥生中期	甕	破片 口縁部付近	良好	細砂粒多含。	明褐色
88	E 7 黒土層	1971.11.18.	弥生時代	砥石	完形	—	—	白味の灰色